

韓国がノーベル賞を

取得できない四つの理由

伊藤製作所社長
中京大学大学院ビジネスイノベーション研究科客員教授
ソウル産業大学校金型設計科名誉教授
伊藤 澄夫

アジアオリンピック評議会が主催する第十九回アジア競技大会が九月十九日から二十四日までの十六日間、韓国・仁川で開催された。インドのニューデリーで第一回（一九五一年）が開催されてから、日本は第八回大会（一九七八年）まで、金メダルを独占していたが、第九回大会から仁川大会まで中国がトップで韓国が二位、日本は残念ながら三位が指定席となった。日本の人口の半分にも満たない韓国だが、冬季オリンピックや日本で開催されているプロゴルフ競技においても日本を大きくリードしている。多くの日本人ゴルフファンは悔しい思いをしていることだろう。

近年、スポーツ以外でも多くの分野で日本に対して優越感を持つ韓国では、ノーベル賞での日本の圧倒的な優位に対して、われわれが思う以上に残念がり、悔しさを隠そうとしない。だが、スポーツがそうであったように、近未来に「韓国はノーベル賞でも日本を追い越すのか」と言えば、答えはNOである。

同じ土俵で戦えば、頑張り屋の彼らは「日本人には負けない」との自信を思っているであろう。今阿はその土俵に天と地ほどの差があることを述べたい。

理由その二 言語の問題

ハンガルの語は十五世紀に発明された。日韓併合時、朝鮮総督府がこのハンガルを発見し、当時多くの韓国民が文盲だったため、学校では日本語とハンガルの教育が開始された。

ハンガルとは発音記号であるため、小説や文庫を読む場合、文字数が圧倒的に多くなる。仮に日本の小説がすべてひらがなで書かれていたとしよう。漢字文を読むことと比較すれば、途方もない時間を要することとなる。その上、多くの同義語に対して、漢字であれば瞬時に理解できるが、ハンガルやひらがなでは文章の流れで意味を考えなくてはならない。

例えば、ハンガルの「ペ」の意味は楯、船、杯、梨、お腹の五通りがある。同音の意味を考える時間の長さは、日本や中国の漢字圏

して以来、謙謙の日本人が急増、これは、今までのように日本からスムーズな技術移転ができなくなることを意味する。日中に負けない技術力や経済力を維持するため、反日は韓国民にとって鬱憤を晴らすことはできるだろうが、韓国経済の足を引っ張ることに気が付かねばならない。

理由その三 要素研究データが不足

研究開発予算が少ないことで、当然蓄積された要素技術や文献は極端に少ない。また研究開発を進めるに当たり、特殊材料や特殊医薬品などの必要資材を自国ですべて手配することは無理である。この面では中進工業国レベルといえる。安易な手段で海外から出来上がった研究要素を得ることは、研究意欲が高まらない。韓国が発展するには、無駄があろうと初步的なものより段階を踏み研究開発し、要素技術を蓄積するべきだ。

理由その四 モノづくり技術の歴史的弱み

日本は三〇年代後半には世界の

列強国が凌駕し上がる超ド級の戦艦や空母、潜水艦、戦闘機を生産する技術を有していた。一方、韓国の近代化が始まったのは朴元大統領時代の六五年からであり、現在でも七十年前の日本レベルの空母や潜水艦を建造することは不可能であろう。

また、環境技術や生活水の製造技術、医療機器、特殊材料、精密工作機、リニアモーター列車など、日本は数えきれないほどモノづくり技術の幅が広い。韓国では十五あまりの財閥とそのグループ会社の存在感が大きくなり、いまや先進国の企業と互角の力を有するだろう。しかし、日本と韓国の中小企業の技術力の差は歴然としている。

このような理由で、韓国が近未来に日本を追い越すようなノーベル賞の取得は絶望的と思われる。優秀な韓国の技術者や学者が懸命に研究しているのは事実であるが、過去の蓄積された経験値を網羅しての研究開発でなければその成果は期待できない。このような研究開発における歴史の差は韓国

と比較して不利であることは明らかである。ハンガルは「韓国だけの文字である」とプライドを持つことも必要であろう。いまさら漢字を習うことも大変であろう。しかし、日中との文化的、技術的交流やノーベル賞の受賞に当たり、韓国が漢字を取り入れることが、研究開発においても有利であることは明らかである。

理由その四 研究開発費の予算不足

日本では国や大学、企業が研究開発に巨額の費用を当てている。今年話題になった理化学研究所や多くの研究機関の予算は驚くほどの大きな額である。さらに米園では日本の教員の予算を当てているが、なかでもNASAの予算は群を抜いている。それゆえ米園の基礎研究分野の蓄積は世界一である。日本は米園の基礎要素技術に味をつけ、商品化が巧みであるといわれているが、韓国では主に日本で出来上がった技術や商品を利用（パクリ）している例が多い。近年韓国で反日がエスカレート

にとつて致し方ない歴史の不幸であるし、もはや反日をしている暇はない。他國に頼らず一歩努力を重ね、飛躍してほしい。



いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任。現在に至る。贈り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。(注)日本金型工業会・副会長、国際委員長を歴任。中京大学大学院ビジネスイノベーション研究科客員教授、国立ソウル産大大学院金型設計科名誉教授、神戸大学非常勤講師などを務め、著書に「モノづくりこそニッポンの魂」がある。